

## 細谷十太夫と仙台のハリストス正教会

山下 須美礼

### はじめに

戊辰戦争時の「鴉（からす）組」隊長のイメージで想起される仙台北の細谷十太夫直英（一八四〇—一九〇七）は、さまざまな逸話で彩られた人物である。御所の警備兵として京都に滞在中、興行されていた「伽羅先代萩」の評判に憤慨し、芝居小屋を破壊したとか、戊辰の内乱が起ると、「孫太郎虫売り」に変装して他藩の探索をしたとか、はたまた須賀川（現福島県須賀川市）周辺で侠客なども含む衝撃隊、前述の通称鴉組を急遽編成し、ゲリラ戦を展開した、などということが象徴的に取り上げられることで、武闘派かつ行動的な人物として描かれてきた<sup>①</sup>。それとともに細谷は、戊辰戦争で敗北を喫した後の旧仙台藩領において、窮迫する士族への支援に力を入れた人物でもある。たとえば牡鹿郡門脇村牡鹿原（現宮城県石巻市大街道）の開拓は、時の宮城県令松平正直に対する細谷の進言によって実現したと言われており、明治十三（一八八〇）年十一月、大街道士族授産場として開設すると、細谷はその初代場長に就任している<sup>②</sup>。

一方で当時の仙台北族の周辺には、ほかにも注目すべき動向が存在し

た。それは、ロシアから流入したキリスト教である東方正教（ロシア正教、ギリシヤ正教とも。組織としては「ハリストス正教会」、「正教会」の語も用いる）が、仙台北族を中心に受容されたことである。東方正教は明治初期に北日本を中心に広く信徒を獲得し、次々に教会を設立していくこととなるが、その伝教活動の最大の担い手は仙台北族であり、仙台に設立された教会は東北伝教の中心拠点としてその拡大に大きな役割を果たした。筆者はこれまで、この仙台北族のように、戊辰の敗北藩出身の士族で東方正教を受容した人々を「士族ハリステアニン（クリスチャン）」と位置付け、研究を行ってきた<sup>③</sup>。東方正教に出会った当初の彼らは、活路が見出せない状況のなかで、自分自身や地域社会が新たな展望を持ち得る足掛かりを、東方正教に求めたのである。

最終的に僧籍となる細谷十太夫と士族ハリステアニンらは、信仰を共有することはなかったが、明治初年の立場やその活動の目的は重なる部分も多い。この細谷と仙台北族ハリステアニンとの間に、実は接点があったということは、すでに正教会の教団史である『日本正教伝道誌』<sup>④</sup>や、『仙台北族ハリステアニン正教会史』<sup>⑤</sup>で言及されている。本稿では、ある士族ハリステアニンが残した日記を使用して、その相互の関係をさらに追

及し、信仰の有無を超えた関わりが明治初期の仙台においてどのように展開していたのかについて、その一端を明らかにしたい。

なお、今回中心に扱う士族ハリスティアニンの日記とは、イオアン涌谷繁（一八二九―一八八五）が明治十一（一八七八）年と十二（一八七九）年の二年間執筆した『家翁録』<sup>⑥</sup>という記録である。涌谷家は代々仙台藩の医師を務めた家柄で、執筆時は仙台柳町通りに居住し、町医者を開業していた。仙台にハリストス正教会が成立した際の中心幹部の一人で、妻子も洗礼を受けている（図参照）。『家翁録』には教会活動の様子、教会関係者の出入りが記されているほか、医業の記録、金銭出納、仙台の町の様子なども詳細に描かれていて非常に興味深い。

### 一、細谷十太夫と東方正教の出会い

幕末に開港した函館（現北海道函館市）には、ロシアの出先機関として領事館が置かれた。その領事館付司祭として来日したロシア人宣教師ニコライは布教への情熱を密かに持ち続け、未だ禁教下にあった明治元（一八六八）年、高知藩の浪人であった沢辺琢磨（パウエル）を始めとする三名の日本人に洗礼を施した。この沢辺を通じてニコライとの知遇を得たのが、戊辰戦争に旧幕府側の一員として参戦すべく函館に赴いていた、仙台藩士の新井常之進（奥邃）と金成善右衛門である。この出会いに衝撃を受けた彼らは一度仙台に戻り、同じ仙台藩士の仲間たちに「今より後は、このハリストス教にあらざれば、世道人心を維持する能はざる」と説いたと言われる。再び函館に戻った新井らから、来函を勧

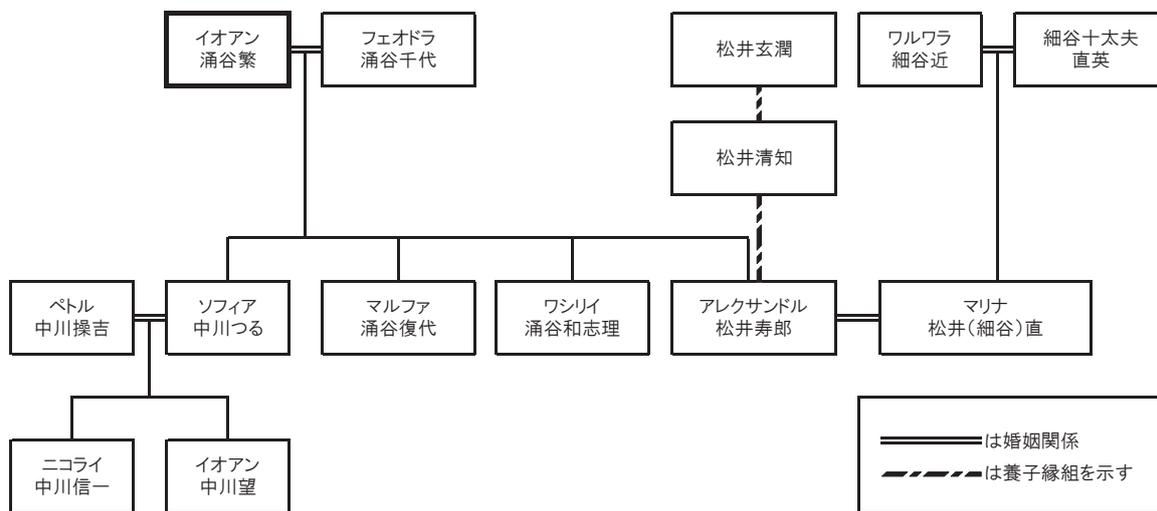


図 イオアン涌谷繁を中心とした人物相関図

※涌谷繁『家翁録』、『仙台人名大辞書』（復刻版 宝文堂 1981）等により作成

める書状を受け取った仙台藩士の小野莊五郎（イオアン）、笹川定吉（ペトル）、大立目謙吾（ペトル）が仙台を発ち、函館に到着したのは明治三（一八七〇）年五月のことである。<sup>8</sup>

その頃パウエル沢辺は、さらなる同志を募ろうと日高国沙流郡（現北海道沙流郡）へと向かっていた。明治二（一八六九）年十一月以降、仙台藩は沙流郡西部の分領支配を命じられ、仙台藩少参事の三好清篤が隊長として一五〇名ほどを率い赴任していた。<sup>9</sup> 明治三年五月になると、星尙太郎をはじめとする仙台藩額兵隊員七〇名ばかりも、赦免の後に仙台藩により送り込まれ、三好隊長の元に合流し、短い期間ではあるが開拓に携わった。<sup>10</sup> 沢辺が新井より受け取った紹介状を持ち訪ねたのは、やはり藩内の佐幕派に対する処分を受けた後、分領に派遣されていた衝撃隊（鴉組）隊長の細谷十太夫であった。<sup>11</sup> この時、両者の面会は叶わなかったが、細谷は直ちに沢辺を追って函館に向かい、東方正教という存在とその伝教の状況について知るところとなったという。このように、細谷は「自ら教を信ぜざるも、斯くの如くにして最初より函館に於て正教を聴<sup>12</sup>」いた仙台藩士の一人となった。その後、ニコライを頼って来函する仙台藩士が陸續することとなるが、「一行数人は困難を忍で其日を送り居る有様なりしが、当時去留<sup>13</sup>に在りたる細谷十太夫・板橋昇（後、ルカ）・粟野実（後、ペトル）・戸澤精一郎等も亦この有志を助力したる事少なからず<sup>14</sup>」と記され、暮らしのあてもなく、志と野心のみで函館にやってきた仙台藩士らを、細谷をはじめとする沙流の分領開拓地の仙台藩士らが、少なからず支える状況があった。<sup>14</sup>

さらに明治四（一八七一）年になると、後に司祭となる高屋伸（イア

コフ）も函館行きを画策するが、その時の状況が以下のように記されている。

涌谷繁（後、イヲアン）は高屋を訪ひ、函館行の目的を質されしかば、告ぐるにハリストス教研究の目的を以てしたるに、涌谷繁は其長男及び今田直胤（後、イヲアン）の長男をも同行せん事を依頼し、且細谷十太夫は今回松島丸と号する帆船にて、初航海を試みる由なれば、同船にて出発せられてはいかと相談せられたり。高屋は細谷に便乗の相談をなして其許諾をうけ、且涌谷繁より其長男をして散髪ならしむる事、ハリストス教を学ばしむる事等の承諾をも受けて出発する事に決定せり。<sup>15</sup>

ここから、『家翁録』の執筆者であるイオアン涌谷繁は、当時十四歳であった長男源太郎（ワシリイ）<sup>16</sup>を正教修学の目的で函館に行かせようとしていたこと、そしてイオアン涌谷と細谷十太夫は旧知の仲であり、その管轄にある船の利用をイアコフ高屋に仲介したことがわかる。なおこの一行には、ほかに細谷の声掛けにより「阿部章治郎・牧野守之佐・柴田文吉・石森八兵衛」<sup>17</sup>など、何人かの仙台藩の若者が加わっており、函館に到着した彼らは「ハリストス教専攻の目的にあらずして、専ら語学研究の目的なりしを以て、敢てニコライ師の塾に入らず。館外に在りて語学を研究せり<sup>18</sup>」という状況にあった。彼らに関して「細谷は事業上に違策を来したるため、この書生に学資を給助する能はざるに至り<sup>19</sup>」という記述が続くことから、志は途絶したとはいえ、細谷が仙台藩の若者たちに函館で修学する機会を与え、学費を支援しようとしていた様子が読み取れる。その後の彼らは、開拓使の学校に入学したり、改め

てニコライのもとで正教を学んだりする道を選んだという。

## 二、仙台のハリストス正教会と西南戦争

日本での伝教体制を整えるため一時帰国していたニコライが、明治四(一八七二)年、再び函館に戻ると、多くの仙台藩士がその帰りを待ちわびていた。ニコライはさっそく彼らに教理を教え、洗礼を施した。そしてイオアン小野莊五郎、イアコフ高屋仲、ペトル笹川定吉の三名を、伝教者として仙台へ派遣し、仙台での伝教に従事させることにしたのである。イオアン小野が同年暮れより仙台東一番丁の自宅を講義所として開始した正教の学習会などには、イオアン涌谷繁やペトル中川操吉、アレクセイ樋渡正太郎など、多くの人々が集まった<sup>20</sup>。この学習会の盛況ぶりには、宮城県庁の警戒を喚起することとなり、明治五(一八七二)年二月より大規模な取り締まりが行われ、ペトル笹川やイアコフ高屋、ペトル中川らが入獄し、イオアン涌谷なども取り調べを受ける事態となった<sup>21</sup>。この騒動がニコライをはじめとする人々の奔走で終息した明治六(一八七三)年、仙台で初めての公祈祷が行われ、ここに「仙台福音教会」を称する東方正教の一教会が、東北地方に初めて成立したのである。成立直後の仙台福音教会に対して、ニコライが送付した「規則二十条」により、議長をパウエル沢辺、議員をイオアン小野、ダニイル影田、イアコフ高屋、パウエル佐藤、イオアン涌谷、イオアン今田等とする教会の体制が形作られた<sup>22</sup>。仙台福音教会は、この後旧仙台藩領を中心とする奥羽山脈より東側の東北の地に、正教会が急激に拡大していく拠点とし

て大きな役割を果たすことになる。

明治十(一八七七)年、西南戦争が起こると、宮城県では臨時巡査の募集が行われ、仙台福音教会に所属する士族ハリストスアニンのなかにもこれに参加する者が現れた<sup>23</sup>。当時東京にいたペトル中川やアレクセイ樋渡はそこで募集に応じ、その後仙台に戻り召募に携わったという<sup>24</sup>。しかしながら、一等小警部となったペトル中川操吉は、別動隊第三旅団付として従軍中の九月一日、鹿児島米倉(現鹿児島県鹿児島市山下町)において三四歳で戦死した<sup>25</sup>。このペトル中川操吉は、イオアン涌谷の長女つる(ソフィア)の夫であり、信一(ニコライ)と望(イオアン)という幼い二人の子供が残された。

イオアン涌谷繁の『家翁録』には、娘婿にあたるペトル中川の戦死をめぐる記録が散見される<sup>27</sup>。

### ① 明治十(一八七八)年一月十日条

〔東京で修学中の長男ワシリイからの手紙の内容の写し〕中川旅費  
日費の残金二十六円五十銭、為替として相下候内より弍円借用候  
間、中川江返済を願フト、

### ② 同年一月十九日条

〔在京中の知人、佐藤益民<sup>28</sup>の借金願いに対し〕中川ノ残旅費、細谷  
ニテ受取りニナリタルナラン、依テ細谷ヨリ受取、信一ノ名宛ニテ  
証券ヲ下ス可シト郵便ニテ答書セリ、細谷エモソヒヤエ相談ノ上ナ  
レハ渡シ可シトノ添書ヲ贈ル、

### ③ 同年一月二十日条

細谷ヨリ十六日附ノ端書ヲ以テ中川ノ碑銘ニ記シヘキ要件ヲ速ニ差

廻シヘシ、且ツ鹿兒嶋ヨリ中川所持ノ皮文庫到着セリ云ト、

④同年二月十三日条

細谷ヨリ一月廿七日發シノ郵便、昨十二日来ル、書中ニ中川ノ鹿兒嶋ヨリ東京迄ノ旅費、金貳十八円ノ内七円佐藤益民江渡シ益民ヨリノ証券アリ、ソビヤエ渡シ、残五十円渡邊幸兵衛出京中ノ処、不日帰県ニ付、同人エ依托相下シヘシ、且ツ中川ノ碑ハ仙台江建チ、碑文ハ大槻復三郎②ニ依頼セリ、未タ出来セズト、

②④の史料中に見られる「細谷」とは、細谷十太夫直英のことである。細谷も同じく西南戦争に従軍し、陸軍少尉として各地を転戦して勇名を馳せたという。③『家翁録』の記述からは、戦争終了後の細谷は、東京で修学中のイオアン涌谷の長男ワシリイのごく身近なところにいたことが読み取れる。①ワシリイにとって戦死したペトル中川は姉の夫ということになるが、二〇歳になったばかりの学生であるワシリイを補佐する形で、ペトル中川に支払われた旅費や遺品の扱いをはじめとする諸手続きを、東京にいる細谷十太夫が代行していたことが推測できる。また、顕彰碑の建立についても、細谷が積極的に働きかけていたことがわかる。なお、仙台福音教会では、戦死したペトル中川操吉に対し、明治十一年二月三日に「救贖ノ祭」③が行なわれている。

三、細谷十太夫の娘マリナ細谷直

明治十一（一八七八）年の『家翁録』の冒頭には、イオアン涌谷繁の家族の名前と生年月日、年齢が列記されているが、そこには「文久二年

七月十三日生 十五年七ヶ月、直、細谷直英ノ女」という記述が並んでいる。「細谷直英ノ女」、すなわち細谷十太夫の娘ということであるが、同年一月四日条に「細谷ヨリ直女江足袋式足贈ラル」、同月十一日条には「直女及ひふく代、各々学校に登る」③とあることから、この「直」は、仙台の涌谷家で家族同様に暮らしていたことがわかる。実父である細谷はこの時期東京に居り、仙台に戻ったのは同年三月のことである。④また、細谷の妻「近」も、「細谷ノ家内七日出帆、午后三時頃到着」という同年五月九日条の一文があり、またそれに続いて「東京ヨリ土産」⑤を彼女より受け取るとの記述があることから、この時に東京から仙台に戻ってきたことがわかる。両親が仙台を留守の間、涌谷家に預けられていた形の直であるが、『家翁録』によると、「両親の帰郷後も変わらず涌谷家で暮らし続けている。

イオアン涌谷繁は『家翁録』において、東方正教の洗礼を受けたハリステアニンについては、原則「聖名」で記述するという方針を取っているが、そのなかで「直」が「マリナ」という聖名で記載されるようになるのは、明治十一年三月五日条からである。また、明治十一年五月三十一日条には「細谷ワルワラ」という聖名記載が初登場するが、その後の明治十二（一八七九）年二月一日条に「マリナ、渡邊秀三ヨリ招カレ行ク午前、午后九時母ワルワラ同道帰ル」とあることから、これはマリナの母親である細谷の妻「近」の聖名であることが判明する。また細谷十太夫妻は、仙台滞在中は樫木（現仙台市若林区）という場所に居住しているようであるが、そこはロマン柴田文吉という人物の住居でもあると読み取れる。⑥ロマン柴田は、前述のように、明治初年に細谷十太

夫の誘いにより函館に修学のため向かった若者の一人である。さらに、明治十二年七月八日条には「マリナ叔父柴田ロマン大病ニ付、看病ノタメ五月十一日榎木へ行き、同人死后養蚕ノ手伝等ノタメ滞留、本日午前帰ル」とあることから、ロマン柴田はマリナの叔父であり、十太夫の妻ワルワラ細谷近の弟であった可能性を考えることができる。これらの記載からだけでは、彼女たちがいつ洗礼を受けたのかは明らかにし得ないが、自身は正教の信仰に距離を置いていた細谷十太夫の妻と娘、そして義理の弟がハリスティアニンであり、十太夫もそのコミュニティのただなかにいたことは間違いない。

涌谷家で生活する日々を、マリナ細谷直はどのように過ごしていたのであろうか。『家翁録』明治十一年七月九日条に「直女仙台師範学校三等卒業証書受取ル」との記述があり、さらに十月十二日条には「マリナ培根小学校へ手伝ニ雇ワル」とあることから、師範学校を卒業し、小学校の教員見習いのようなことをしていたことが推測できる。仙台には明治六（一八七三）年に官立宮城師範学校が開校するが、それとは別に明治八（一八七五）年、小学校教員伝習学校が設立され、翌年公立仙台師範学校と改称された。その後、明治十一年に官立宮城師範学校が廃止されると、その人員や教材などを引き継いだ公立仙台師範学校が宮城師範学校と改称する。この師範学校に女子師範科が併設されたのは明治十（一八七七）年のことで、朴沢三代治や甲田みどりが裁縫科の教師を務めた。<sup>(38)</sup>マリナが通ったのは、この宮城師範学校の女子師範科であったと考えられる。

しかし、マリナ細谷直が小学校教員として活躍する期間は長くはな

かった。それは、松井家に養子に入っていたイオアン涌谷繁の次男、アレクサンドル松井寿郎との結婚話が進められたからである。『家翁録』でその話が具体化するののは明治十二年に入ってからである。明治十二年当時、アレクサンドルは十七歳で、母親の実家である松井家の家督をすでに継いでおり、東京にニコライが設立した神学校の一期生として学んでいた。一方のマリナは十六歳であった。

同年一月五日にイオアン涌谷繁がアレクサンドル松井寿郎より受け取った手紙には、「マリナニ於テ我カ<sup>三云</sup>ニ異論ナクンハ、我カ室ニ定メタキ<sup>(39)</sup>とあった。それに基づき、イオアン涌谷はまず自分の妻フェオドラ千代と長女のソヒヤ中川つるにこのことを相談し、続いて尋ねてきた細谷十太夫との間で「アレキサントルヨリノ書ヲ示シ、弥以マリナ、松井へ送籍ノ事ヲ談決<sup>(41)</sup>」している。さらに、この段階で涌谷家は家督が繁の長男ワシリイに移っていたこともあってか、「ワシリイヘアレキサントル、マリナ、真誠ノ自由ヲ以テ合体ノ望アルニヨリ、細谷夫婦ト服議決定<sup>(42)</sup>」したことを伝えている。マリナの母であるワルワラ細谷近は、この件について聞くと「我ハ最初ヨリ喜ヒ居タル処、中間<sup>三云</sup>アルニヨリ必ス此方ニテ気ニ入サル処アリテナラント、此度ノ事ヲ直英ヨリ聞キ、我カ心初ノ如シ<sup>(43)</sup>」と述べたと記述されており、この結婚が以前より双方の親同士で話し合われ、そのこともあってマリナが涌谷家に預けられていたとも考えることができる。マリナの松井家への「送籍届」が提出されたのは同年一月二十五日のことである。<sup>(44)</sup>

しかし結婚したとはいえ、アレクサンドルは東京に寄留中であり、マリナは引き続き仙台の涌谷家で生活していた。そのマリナに明治十二

年四月、六等権訓導として南材木町小学校での勤務を命じる呼び出しがあった。<sup>45</sup> それに対し、一度「御受書」を提出した後、次に「辞職願」を提出したことが四月十七日条に記されている。

今般六等権訓導第二中学区南材木町小学校在勤拜命仕り、難有仕合奉存候処、父隠居松井清知儀ハ、東京府近衛兵隊編入中ニ有之、夫同苗寿郎儀ハ、同府寄留御暇中ニ有之、私忝人ニテ家事取締罷在候ニ付キ、日々出校之御用難相勤候間、解職被成下度此段奉願候也、ここに「父隠居」とある松井清知は、『家翁録』の記録では安政元（一八五四）年生まれ「寿郎養父隠居」とされ、文久元（一八六一）年生まれのアレクサンドル松井寿郎とは七歳しか違わない。<sup>47</sup> この二名が仙台にいないことを理由に、マリナは小学校への勤務を断ったのである。

#### 四、宮城県の殖産興業と細谷十太夫

明治十一（一八七八）年三月に帰郷した細谷十太夫は、その後、何をしていたのであろうか。その前年より宮城県には「宮城集治監」の建設が計画される。これは西南戦争による国事犯を収容することを主目的としつつ、過剰収容の緩和や、獄制の近代化を図ろうとしたものであると指摘されている。<sup>48</sup> この前身となる宮城県監獄署の副典獄を務めた人物の日記には、細谷が仙台に戻った同年三月十一日に、後に宮城集治監建設委員長となる警視局小野田警部や宮城集治監初代典獄となる石沢権大警部とともに、「細谷三等中警部」が宮城県監獄署を訪ねたことが記されている。<sup>49</sup> このことから、東京にいる段階ですでに、細谷はこの事業に

関わりを持っていたことが推測できる。宮城集治監は、伊達政宗の居所であった若林城跡（現仙台市若林区古城）に明治十二（一八七九）年、東京集治監と同時に完成した。ベルギーのルーバン監獄をモデルとした本格的な洋風建築であり、看守所である六角形の塔から六棟の房舎が放射状に配置された斬新な建物であった。<sup>50</sup> イオアン涌谷繁は明治十二年三月十九日条で「阿部文同行ニテ中央檻獄へ行キ、細谷ノ按内ヲ以テ檻中ヲ詳見セリ」、同四月十六日条でも「小田嶋椿所ト同伴ニテ大久保嘉吟<sup>51</sup>、中央檻獄、彼所ニテ細谷ニ面会、按内者ヲ乞フテ一覽」と記しており、細谷の案内で集治監のなかを見学している。洋風建築の物珍しさももちろんあったであろうが、西南諸藩への複雑な思いも、その動機の一部であったと言えよう。

さらに宮城県では明治十一年頃より野蒜築港事業が始まったが、その野蒜港に物資を輸送するための、北上運河の建設も開始された。明治十二年、細谷は宮城県五等属として、この運河工事の夫役監督を務めたという。<sup>52</sup> この任務のなかで排水される牡鹿原に目をつけ、前述の開拓を進言するにいたるのである。この職務を得たことは、『家翁録』明治十二年五月二日条で、イオアン涌谷も記している。

陸前少尉兼中警部勲六等細谷直英

兼任宮城県五等属

土木課地理事務申付候事、

右本日拜命ニ付来ル、

この後、細谷は石巻と仙台を頻繁に往復していた様子が『家翁録』の記録より読み取れる。たとえば同年九月九日条にある「細谷今日石巻ヨ

り上リタルト来ル」というような記事が散見され、仙台に来るたびにイオアン涌谷、そして娘マリナのところへ顔を出しているのである。また、妻のワルワラ細谷近も「細谷夫婦来ル<sup>52</sup> 午<sup>53</sup> 酒、チカ女一昨日石巻ヨリ上リタルト」とあるように、十太夫とともに石巻に滞在していた様子がうかがえる。さらにはアレクサンドル松井寿郎と結婚した娘マリナも「マリナ明日父ト石巻へ二三夜泊リニ行ク、依テ本日榎木へ行キ泊ス<sup>54</sup>」とあり、父に同行して石巻に行くことがあった。これらは、野蒜築港およびそれに付属する開拓事業に対し、細谷十太夫がいかに熱心であったかを示すものであると言えよう。加えてマリナはそれ以前の同年十月三日条で「東三番丁勸業場絹機織修業ニ出席<sup>55</sup>」しており、父親の殖産興業への没頭の影響を読み取ることができる。

一方ハリストス正教会においても、野蒜築港に呼応する動きがあった。北上川流域、支流域のハリステアニンを中心に、明治十二年、商業結社「広通社」が結成されたのである。<sup>54</sup> 当該地域のハリステアニンたちには「野蒜港ハ実ニ我教会ノ幸福ニステ天主ノ佑クル所ナリ<sup>55</sup>」との思いがあった。明治十三（一八八〇）年二月に「広通社創立ノ趣意<sup>56</sup>」という一文が『仙台日日新聞』に掲載されるが、執筆者はペトル大立目謙吾とアレクセイ樋渡正太郎の二名であった。彼らは、明治の初年に函館に渡った士族ハリステアニンである。このアレクセイ樋渡について、『家翁録』明治十二年十二月二十六日条には「在佐沼駅樋渡ヨリ廿三日記ノ郵便アリ、広通社ノ景況ヲ實際ニ目撃スルニ、世上ノ風説ト異ナリ、案外ニ奇男児多ク遠カラス好結果ヲ見ルニ疑ヒナシ、何レ来一月中參堂続々セシ<sup>57</sup>」と記され、仙台に在る士族ハリステアニンもその動向には注視し

ていたことがわかる。広通社は横山村（現宮城県登米市）に製糸場を開業し、蒸気船を運行させるなど、事業を拡大したが、明治十三年五月には倒産という結末を迎えた。しかし、これら野蒜築港事業に乗じたハリステアニンの商業活動への参入について、その事業の中枢にいた細谷十太夫の影響を無視して考えることはできないであろう。

#### おわりに

『家翁録』というイオアン涌谷繁の日記を中心に、仙台の士族ハリステアニンと、その信仰を持たない細谷十太夫との関係を概観してきた。ここからは、単に接点があるというだけにはとどまらない、婚姻関係を含むかなり密接な関係性が築かれていたことを指摘することができる。涌谷家には、細谷十太夫に限らず、ハリステアニンではない仙台士族が、それと同じくらい日常的に多数出入りしていた。宮城県の近代化、若い世代の教育など、彼らが課題としていたことに対しては、当然信仰の有無を超えたところでの連携が必要だったであろう。それとともに、この時代、教会に関心を持つ人は多くいても、その信仰心が永続的に定着する人ばかりではなく、非常に流動的な状況であったと考えられる。そのため、東方正教の信仰を持つということを、日常の交際のなかでどう評価するか、ということは自他ともに未だ固定できるものではなく、双方向にとって何かしらの影響をもたらすものとして扱うことが難しかった可能性がある。しかし、そうであればこそ、妻や娘がハリステアニンとなり、旧知のイオアン涌谷繁を通じて教会関係者とも交流のある細谷十

大夫のような人物にとって、東方正教の信仰がどのようなものとして受け止められていたのか、さらに考えてみる必要があるであろう。

それについて考察を深める視点の一つとして、女性ハリストスアニンたちの存在がある。本稿ではあまり触れられなかったが、涌谷家の女性たちと細谷の妻や娘の関係など、彼女たちの日常かつ密接なつながりは、男性ハリストスアニンの交際とは別個に形成され、独自の役割が発生していたと考えられる。このような女性ハリストスアニンの営みが、地域社会のなかで教会活動が根付き、そこに東方正教のイメージが形作られる上で大きな働きをなしていたのではないであろうか。また、マリナが師範学校に通ったように、他の女性ハリストスアニンのなかにも教員となる人々がいたことが『家翁録』にも見受けられ、そのような存在がもたらす意義も大きかったと考えられる。これらについては、今後さらに検討していきたい。

## 註

- (1) 木村紀夫『仙台藩の戊辰戦争 幕末維新人物録282』（荒蝦夷 二〇一八）三〇二―三〇三頁や、同「からす組隊長細谷十太夫」（『りらく』二四一―二四二頁）による。
- (2) 石巻市史編纂委員会編『石巻市史 第四巻』（石巻市 一九六二 八八頁）や、石巻市史編さん委員会編『石巻の歴史 第二巻 通史編（下の2）』（石巻市 一九九八）一一八頁に詳しい。
- (3) 拙著『東方正教の地域的展開と移行期の人間像―北東北における時代変容意識―』（清文堂出版 二〇一四）等で士族ハリストスアニンについて触れている。

- (4) 石川喜三郎編『日本正教伝道誌』巻之壹・巻之貳（正教会編輯局 一九〇二）。

- (5) 教会史編集委員会編『仙台ハリストス正教会史』（仙台ハリストス正教会 二〇〇四）。

- (6) 個人蔵。

- (7) 前掲（4）、巻之壹、五五頁。

- (8) 前掲（4）、巻之壹、六九頁。

- (9) 木村紀夫『仙台藩の戊辰戦争 幕末維新人物録282』（荒蝦夷 二〇一八）、三三二頁。

- (10) 同右（9）、二九八―三〇一頁。

- (11) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史』（宮城県 一九六六）七一―七二―七三頁。

- (12) 前掲（4）、巻之壹、六四頁。

- (13) 前掲（4）、巻之壹、九〇頁。引用中の丸括弧は、原文の記載内容である。本文献からの引用については、これ以降も同様。

- (14) 教会史編集委員会編『仙台ハリストス正教会史』（仙台ハリストス正教会 二〇〇四）、二四頁にも言及がある。

- (15) 前掲（4）、巻之壹、一〇二―一〇三頁。

- (16) 『家翁録』明治十一年の冒頭に記載された家族の生年月日と年齢に基づく。後に本名も聖名と同様「和志理」と名乗る。

- (17) 前掲（4）、巻之壹、一〇三頁。

- (18) 前掲（4）、巻之壹、一〇六―一〇七頁。

- (19) 前掲（4）、巻之壹、一〇七頁。

- (20) 前掲（4）、巻之壹、一四三―一四四頁。

- (21) 前掲（4）、巻之壹、一五〇―一五六頁。また、逸見英夫「宮城県下 耶蘇教講説事件」（渡辺信夫編『宮城の研究 第六巻 近代篇』清文堂出

版 一九八四)にも詳しい。

(22) 前掲(4)、巻之式、四一頁。

(23) 大谷正「仙台地域の西南戦争関係資料と『仙台南聞』西南戦争関係記事」(『西南戦争に関する記録の実態調査とその分析・活用についての研究』平成二一年度～平成二三年度科学研究補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書 二〇一二 四三―四九頁)や、友田昌宏「西南戦争における旧仙台藩士の動向」(『東北文化研究室紀要』五八 二〇一五) 一一―五頁に詳しい。

(24) 前掲(4)、巻之式、七八頁。

(25) 『仙台人名大辞書』(復刻版 宝文堂 一九八二)、七九九頁。

(26) 長男信一は陸軍の軍人に、そして次男望は内務官僚となり、鹿児島県知事や大阪府知事等を歴任した。

(27) 『家翁録』からは、一日分、もしくは一つ書きの記載の一部を引用している。また亀甲括弧内の記載および読点は引用者による。本史料からの引用についてはこれ以降も同様。

(28) 佐藤益民については、岩沙慎一「教育令公布期のある私立漢学学校―佐藤益民の共賛学校―」(『愛知教育大学研究報告(人文科学・社会科学編』一一号 一九七二)に詳しい。この一七六頁には「益民弟文七妻とみの実父は、陸前国宮城郡仙台区柳町通八番士族浦谷繁」とあるが、「とみ」についての詳細は不明である。

(29) 大槻復三郎とは、大槻文彦のことである。

(30) 前掲(25)、九三九頁。

(31) 『家翁録』明治十一年一月十六日条には「昨十五日中川よりワシリイ江郵便相立候ニ付、同人并ニ細谷江賀年の書を贈ル」とあり、ワシリイへの郵便に細谷への年賀を同封しており、少なくとも身近なところに行ったことが読み取れる。また、同月十八日条には「細谷直英ヨリ本月十三

日附ヲ以テ賀年ノ郵便正午到着、書中ニ一昨十一日一等昇級、并ニワシリイも過ル十日入校ノ由等ノコトアリ」とあり、東京にいるワシリイの様子を、親代わりに気にかける立場にあったことがわかる。

(32) 『家翁録』明治十一年二月三日条。

(33) 「ふく代」は「復代」とも書き、慶応三(一八六七)年生まれのイオアン浦谷繁の娘。マルファという聖名を持つ。

(34) 『家翁録』明治十一年三月十一日条に「細谷直英来ル東京七日船」とある。

(35) 『家翁録』明治十一年五月三十一日条。

(36) 『家翁録』明治十二年十二月二十一日条に「マリナ明日父ト石巻ヘ二三夜泊リニ行ク、依テ本日榎木ヘ行き泊ス」とある。またマリナが榎木に出向き、宿泊する記載は数多く確認できる。

(37) 『家翁録』明治十二年二月十日条に「細谷酒ヘ行き、柴田ロマンヘ鶏卵五ツ贈ル」とある。

(38) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史 11 教育』(宮城県 一九五九) 二五二―二六八頁。

(39) 『家翁録』明治十二年一月五日条。

(40) 『家翁録』明治十二年一月九日条。

(41) 『家翁録』明治十二年一月十日条。

(42) 『家翁録』明治十二年一月二十日条。

(43) 『家翁録』明治十二年一月十四日条。

(44) 『家翁録』明治十二年一月二十五日条。

(45) 『家翁録』明治十二年四月十六日条。

(46) 『家翁録』明治十二年冒頭部分。

(47) 前掲(25)「松井寿郎」の項目では、「松井梅屋の孫、玄潤戊辰役に死して嗣なし、浦谷氏姻戚たるを以て寿郎をして後たらむ」(九五九頁)とある。玄潤とは松井竹山の子であり、イオアン浦谷繁の妻フェオドラ

千代は松井家の出であったと考えられる。この松井清知についての項目は、『仙台人名大辞書』にはなく、関係性を明らかにし得ないが、おそらく玄潤の死後、松井家の家督を一旦継いだ人物で、アレクサンドル松井寿郎は形式上この人物の養子となり、松井家の家督を引き継いだものと考えられる。なお、竹山の父親は俳人松窓乙二であり、その娘で同じく俳人として活躍した溶々が松井梅屋に嫁ぎ、竹山を養子とした。

(48) 小野義秀『宮城集治監雜考』（非売品 宮城刑務所 一九八三）三―六頁。

(49) 柴修也『西南戦争余話（宮城県に配置された国事犯）』（非売品 一九九〇）に所収された「宮城県監獄署副典獄水野重教の日記（西南戦争関係分）」二頁より。また、同（増補版 一九九〇 五四―五五頁）には、明治十二（一八七九）年に細谷十太夫が宮城集治監設置にあたり委員に任命されたとの記載がある。

(50) 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編6 近代1』（仙台市 二〇〇八）八二頁。

(51) 石巻市史編纂委員会編『石巻市史 第四卷』（石巻市 一九六二）八八頁。

(52) 『家翁録』明治十二年十一月七日条。

(53) 『家翁録』明治十二年十二月二十一日条。

(54) 広通社については、佐藤憲一「ギリシャ正教の受容と結社―佐沼顕栄会と広通社について―」（渡辺信夫編『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社 一九九二）に詳しい。

(55) 「（石巻光明会から佐沼顕栄会への手紙）」（宮城県図書館所蔵『半田家文書』内「教会資料・3」所収、表題なし）。

(56) 「広通社創立ノ趣意」（宮城県図書館所蔵『半田家文書』内「教会資料・3」所収）。

（やました・すみれ 帝京大学文学部准教授）